第六回ホスピ川柳

選考結果 & 選評

2024

Meilleur Co., Ltd.
3-9-2, Yurinokidai
Yachiyo-shi
Chiba 276-0042
Japan

■総評：高鶴礼子

今、自分の中にこぼれおちてきた、これを記そう、この一瞬の、この思いを書き残すのだ、と、今回も大勢の方々がお心を尽くして下さいました。川柳に託して、それを果たそうとして下さったことに、心からのお礼を申し上げます。書く、ということを通して、様々な《私という現在地》が刻まれ得るということ。その掛け替えのなさを、改めて抱きしめさせていただきました。何より、嬉しかったのは、こうして川柳と向き合って下さったすべての方々が、ご自身の裡にあるその思いを、なんとかして言葉にしようと、真正面から格闘して下さったことが、その御作品から伝わりくることです。日々を生きる中で、その一刻一刻は通り過ぎ、変容していくものであっても、そこに確と存在していた《その刻限の私》は、そうやって紡がれた言葉たちの中で、そっと、息をし続けていてくれます。どうか、これからも、みなさんおひとりおひとりの心の現在地を刻み続けていらして下さい。そうした造形、そうした発信が、きっと、ステキな分かち合い、ステキな出会いを連れて来てくれるに違いありません。

■大賞：何もかも忘れた人を忘れない　葉火

■準賞：頼むから　泣くな詫びるな　まだ逝くな　ホルモンくん

■佳作：後掲の十作品

■佳作：あぁ父ちゃん　まだ呼ばないで　母ちゃんを

ひで

自然極まる口語体で発された訴求の、なんと、切実で、アクチュアリティーに満ちていることでしょう。机の上の拵え事などでは決してない、自身のお心を丸ごと差し出しておられる造形が湛え居るものが迫り来て、思わず、「あぁ」を噛みしめてしまいました。《ここに描かれたひと》のお父上は、どうやら、すでにお亡くなりになっておられる模様です。そうして、今、なんと、お母様までもが、危うい状態におられることが、作者の紡いで下さった語りから、じんと、伝わり来ます。そうした事態のど真ん中で、《ここに描かれたひと》は、こう叫ぶのです。　……あぁ、父ちゃん……、父ちゃんが母ちゃんのことを大事に思ってるってことは、よーくわかってるーー。もう、そろそろ、いいかな、一緒にいたい、って、思ってるって、ことも……。でも、でも、でも。父ちゃん、お願いだよ。母ちゃんのこと、まだ、呼ばないで。まだ、連れて行かないでーー。父ちゃん、お願い……、母ちゃんには、もっと、もっと、生きててもらいたいんだ。父ちゃんにできなかった親孝行の真似事を、ほんのちょっぴりだけでも、母ちゃんに捧げたいんだよ。だから、だから、だから、お願い、お願いだよ、父ちゃん。母ちゃんを呼ばないで……、と。

ご両親に対する呼称を「父」や「母」、「母さん」や「父さん」ではなく、「父ちゃん」そして「母ちゃん」と措定なさったことによって、語りのど真ん中にある思いの切実さが、それを念じるひとの体温と共に、読者の元へと届けられることと成りました。だからこその訴求力、だからこそのインパクトに嬉しく瞠目します。句頭に据えられた「ああ」という感嘆詞の表記が、「ああ」ではなくて「あぁ」であるところも、言い難い風情を構築してくれています。加えて、「まだ」という副詞に託された思いが、語りを、確と下支えしてくれているところにもご注目を。こぼれきた思いを、どのような言葉に託して語るか、という立ち位置における言葉の選択の的確さが光ります。刻まれてある、紛れもなき《ほんとう》が、そっと、そっと、沁み来ました。

■佳作：「おやすみ」と母、言ったきり　逝ったきり

とみこ

なんということでしょう。「おやすみ」という何気ないひとことが、《ここに描かれたひと》の母君の、最期の言葉だったというのです。《その時》が、いつかは来る、ということは、誰よりも身に沁みてわかっていた……はず……、なのに――。なんで、私は、こうなることを予測できなかったのだろう……と。湧き起こりくる、そんな思いを胸に、眼前に突きつけられた状況を、ただ見つめることしかできない《ここに描かれたひと》の姿が迫り来ます。静かな語りの背後から、ひしひしと沁みくるのは、その言い様のないほどの愕然です。お願い、私が代わりになる、だから、だから、返して、お願い、母さんを――と。どんなに希っても、どんなに悔いても、どんなに叫んでも、それは叶わないことなのだと、誰よりも解っていながら、そう希い募らないではいられない――、どう、思ってみても、もう、覆すことのできないことなのだ、これは……、と、懸命に自身に言い聞かせている《ここに描かれたひと》の心象が滲み来て、たまらなくなってしまいました。加えて、後段の語りが、「きり」という、特定の状況が、ずっと、続いている状態を示す措辞に取り合わせるかたちで、「言ったきり」と「逝ったきり」と、掛詞によって綴られているところが、何と言っても眼目です。この措定によって、得難い情趣が一句に宿り来ることとなりました。どんなに悔いてみても、どんなに思ってみても、「……きり」なのです。どうにも仕様のないこの眼前の真実は、ただ、継続されてゆくしかないのです。そっと差し出された語りが孕むアクチュアリティー、そして深さを、しみじみと、受け取らせていただきました。

■佳作：手をひかれ　歩いた道を　手をひいて

のほほん

セツメイでなく語る、ということはどういうことであるのか――、という、詩的言語による造形の本質とでも言うべき事柄が、自然体の裡に、そっと差し出されているところに、《ああ……》が立ち上がり来ます。その《ああ……》が湛えてくれている情趣の、なんと深くて、あたたかくて、切ないことでしょう。《ここに描かれたひと》が、今、歩いている「道」は、かつては「手をひかれ歩いた」、そんな「道」であったのです。それが、今では、同じ道が「手をひいて」歩く道となっている、なってしまっている、と――。誰に手をひかれて歩いた道であったのか、そうして、今、その道は、誰の手をひいて歩く道となっているのか、刻まれてある歳月と、その歳月を互いに互いを大切にして生き続けた《ひと》と《ひと》の在り様が、じんと沁み来て、たまらなくなってしまいます。小さかった僕を、そんな僕の手をひいて、いつも、この道を歩いてくれてたんだったよなあ、母さんは――、それが、今では、おんなじ道を、僕が母さんの手をひいて歩いている、んだ……と。ああ、ほんとに、いろんなことがあった、子供だった自分が大人になって、その分だけ、あんなに元気だった母さんに衰えが兆しきて――。《ここに描かれたひと》が噛みしめている思いは、母そして子が、母と子として刻み来た歳月の持つ豊穣さと切なさなのです。一刻一刻が、母を、そして子を、その関り合いを、不二のものとして育て上げてくれてゆきます。「手をひかれ歩いた道」と「手をひいて歩く道」という対置を立てた上での語りが、なんと言っても眼目でした。

■佳作：歩行器がはずむ廊下は孫来る日

アガサンパス１３５

素直にお心を記されているところに、《ここに描かれたひと》のお人となりが沁み来ます。机の上の拵え事ではなく、体温を感じさせる描出となっているところが、得難いお味であると言えましょう。「歩行器がはずむ」と記されていることによって、《ここに描かれたひと》は歩行器なしでは歩けない状態でいらっしゃることがわかります。自由気ままに歩行が可能である状態と比べれば、それは、それなりに、ご不自由さを享けとめ、それと向き合わなければならない状況であると言えましょう。それでも、《ここに描かれたひと》は俯いてなどいらっしゃらないのです。おお、今日は孫が来る、孫が来てくれる、と――。嬉しいワクワクが沁みくる微笑みが見えてきそうなほど、《ここに描かれたひと》は、あたたかで、ほこほことした刻限を刻んでおられます。「歩行器がはずむ」という、擬人法仕立ての措辞によって、読者に向けて差し出されるものが、《ここに描かれたひと》の現在の身体状況であるとともに、今日、これから起こるであろうできごと、そして、それに対する《ここに描かれたひと》の心象を余すところなく伝えくるものとなっていることによって、《ふくらむ語り》となりました。

■佳作：優しさが　見えない傷も　癒してる

なまけもの

ああ、本当に、本当に、その通りですよね、と、大きく頷きたくなります。《見える傷》であるならば、もちろん、お医者様が、その知見に基づいて治療をして下さいます。でも、人には、時には「見えない傷」もあって、それを「癒」すのは「優しさ」なのです、と、《ここに描かれたひと》は言い切り、その思いを噛みしめておられるのです。お医者さんや看護師さん始め、医療と向き合い、関わっていて下さるすべての方々が示して下さる「優しさ」というお心の現在地によって、「見える傷」のみならず、「見えない傷」までもが癒されることとなる、と――。ただただ、ありがとうございます、を、お伝えしたくなります。心からの感謝を籠めて。

■佳作：戴帽（たいぼう）の　初心を日々の　糧（かて）とする

井蛙

「戴帽の初心」という措定の力強さと的確さに瞠目します。勉学と真摯に向き合い続けた日々を経て、辿り着くことのできた「戴帽」というその日。「戴帽」の、まさにその瞬間、心に兆した思いの、得難さ、忘れ難さ、そしてその重みが、じんと沁み来て、感じ入ってしまいました。その時の思いを、《ここに描かれたひと》は、決して、忘れることなく、心に刻み続けておられるのです。あの日、あの瞬間の思いを「初心」として、私は、それを、「日々の糧」としてゆくのだ、と――。これほどまでの《誠実》、これほどまでの《真摯》があるでしょうか。自身の選んだ仕事に、自身のすべてを賭けてゆく、とする対峙の姿勢が、《ここに描かれたひと》の心意気が、確と見えてくる様で、見惚れるとともに、大きく打たれました。

■佳作：歳重ね　台本にない　風が吹く

桃太郎

おお、まさに。まさに、そうなのですよねえ。「歳」を「重ね」ることによって、様々な変化が、変遷が、にんげんを始めとした生きとし生けるものすべてに訪れ来ます。それを「台本にない風が吹く」とした措定が秀逸で、その頼もしさに、じんと惹かれました。「歳」を「重ね」ることによって台本化してゆく事柄や体験もあれば、「台本にない風」が「吹」いていることを感じる、そんな刹那もある、という、生き物たちの《生きる》の在り様が、確と刻まれているところが胸に迫り来ます。ここを書こう、として下さったことが嬉しくてなりません。これからも、この調子で、《生きる》の裡にある種々の相を書き留めていらして下さい。さりげなく差し出されてある語りの、それが孕む深さが、なんと言っても、大きな味わいでした。

■佳作：やさしい手　添えて明るむ　顔の色

眠り猫

「やさしい手」であるからこそ、なのですよね。語りのど真ん中に、この条件節が据えられているところが、説得性を下支えしてくれています。「やさしい手」だからこそ、それを「添え」れば、「顔の色」は「明るむ」、と――。おお、その通り！ですよね。「顔の色」さんを「明る」ませるほどの「やさし」さを備えた「手」、そのふくらみとやわらかさを思います。おそらくは、「やさしい手」になれるまで、《ここに描かれた手》さんは、頑張られたのだと感じます。そんな「やさしい手」さんだからこそ、「顔の色」さんも、自然体で「明るむ」ことができたのでしょう。「やさしい手」さんが、これからも、ずっと、「やさしい手」さんでいられることを、心よりお祈り致しております。地上に生きる「手」さんたちみんなが、「やさしい手」さんでいられれば、戦争はなくなるに違いありません。

■佳作：秒針よ急ぐなもっと子でいたい

じゃじゃまる

ピシリと言い切る形の語り口の中、「秒針」という具象に託して差し出された、母、そして父を思うその心情の懸命さ、そして新鮮さに、大きく打たれました。刻限を刻み続ける「秒針」は、ご存知の様に、これでもかというほどの定刻を刻み続けるのが使命であり、宿命であるところの存在物です。秒針の刻む時空間の基調は一秒。この「一秒」は「一秒」であって、それ以外の何ものでもありません。それを、《ここに描かれたひと》は「急ぐな」、急いでくれるな、と制するのです。それだけでも充分に、《発想的おもしろ》を感じさせる措置ですが、なぜ、そう願うのか、という理由の開示が、これまた、極めて新鮮で、そこがこの句の大きな魅力となっています。《ここに描かれたひと》が「秒針」さんに対して、急がないでくれ、と頼む理由は、なんと「もっと子でいたい」からなのだというのです。おおっ、と、思った次の瞬間に立ち上がりくるのは、その説得性の高さです。確かに、時を刻む指針が早く時間をカウントしてしまうと、過ぎゆく時間は短くなってしまいます。長針が一回りする時間を一時間と措定した時に、長針の刻む速度が倍になってしまうと、一時間という時空は、現在の措定の二分の一の時間となってしまう、ということが起こり得るのです。それが可能態であるということが、この句の新鮮な具象との取り合わせを説得的なものとしているという次第です。たとえ、そうしたことは措くとしても、「もっと子でいたい」という発語が連れてくる心象に、大きな物語を感じてしまうのは私だけでしょうか。何ゆえに《ここに描かれたひと》は、そう希うのか。何が《ここに描かれたひと》の前に立ちはだかっているのか。言い切りの鋭さが連れてくる情趣が物語を、ふくらませてくれているところが眼目でありましょう。《ここに描かれたひと》は、これから、どうするのか、そして、どうなるのか。《ここに描かれたひと》が辿ろうとなさる《これから》を見つめ続けていたくなります。心からのエールと共に。

■佳作：もう一度 呼んで 貴方がくれた名を

リン

語りが携えている手掛かりの、その差し出し方の見事なることに、ハッとさせられます。《ここに描かれたひと》は、どの様なひとに向かって、この言葉を差し出しているのか、そして、それは、どのような状況下で語り掛けられたものであるのかー。そうした事柄が、セツメイではないかたちで、このやわらかな措辞の裡に、確と記されて在るのです。

《ここに描かれたひと》は、そっと、静かに、「もう一度呼んで」と願い出ておいでです。願い出ている人がいる、ということは、その人に願い出られている誰かが存在している、ということに他なりません。それは、一体、どの様な人であるのか、《ここに描かれたひと》にとって、どういう関りを持っている人であるのかー。それについての手掛かりを、作者は極めて自然なかたちで指し示してくれています。「もう一度呼んで」の次に置かれた「貴方がくれた名を」、これがその揺るぎなき手掛かりです。「貴方がくれた名」というのは、すなわち、「貴方」なるその人が「くれた名」、「貴方」なるその人が名付けてくれた名前である、と、解せましょう。つまり、「貴方」なるその人は《ここに描かれたひと》の名前を考え、付けた人である、ということになります。名付けには色々な方法が考えられますが、ごくごく一般的には、名前というものは、その人がこの世に生まれ出た時に、親御さんが考えて付けて下さるという形を採ることが多いのではないかと感じます。ということは、どういうことか。《ここに描かれたひと》が語りかけているのは、自分のその名を付けてくれた人、すなわち、親御さんである、と、解せることとなります。《ここに描かれたひと》が語りかけているのは、そのひとの母君、あるいはお父上である、ということなのです。加えて、「あなたがくれた名を」呼んで、ということは、私の名前を呼んで、と、その父なるひと、あるいは母なるひとに願い出ている、ということになります。しかも、それは「もう一度」という、条件の付加された願い出なのです。このことを、皆さんは、どのように解されますでしょうか。

初めに注目すべきは、「もう一度呼んで」と、あえて、願い出ているところです。ごくごく普通の、何もない状況であれば、子どもが親に、私の名をもう一度呼んで、などと、言う必要性は、あまりないのではないかと感じます。言われなくても、必要があれば、呼ぶ、というのが常態の対応です。それを、《ここに描かれたひと》は、あえて、言い募っているのです。あえて言い募る、ということは、言い募らなければならない状況に在る、ということになります。「もう一度」という措辞に込められたニュアンスには、お願い、せめて、もう一度、もう一度だけ……という意識が見てとれます。以上のことから解しますに、おそらくは、《ここに描かれたひと》の親御さんは、我が子の名を呼ぶこともできない状態になってしまっておられるということ、そして、そんな父、あるいは母を、《ここに描かれたひと》は眼前に見据え、懸命に、すがっておられる、ということになるのです。病床の、あるいは、何かしらの事故現場に横たわる父君、母君を、茫然と見つめ居る《ここに描かれたひと》の心象を思うと、たまらなくなってしまいます。お願い、せめて、せめて、もう一度、と、《ここに描かれたひと》が見据える大切なひとの現在地が、語り掛けられてあるその一言によって、静かに炙り出されてゆくところが、秀逸でした。

■準賞：頼むから　泣くな詫びるな　まだ逝くな

ホルモンくん

たいせつな、たいせつな《そのひと》に向けて差し出されるた切なる希いの、これは、まさに《絶唱》とでも言うべき、激しく、懸命な思いの結実です。《ここに描かれたひと》は、今、その眼前に、言い難い事態を突きつけられてしまっているのです。母君、あるいは父君、ご兄弟・姉妹といった、ご親族でしょうか。それとも、ずっとずっと関り続けて来た友人、もしくは、一緒に生きていくことを誓い合った不二のひとであるのかもしれません。いずれであっても、たいせつな《そのひと》は、今、喫緊の状態に置かれていらっしゃる様です。もっと、もっと、一緒に生きていきたかった、生きていけると思っていた……、なのに、なのに――。ごめん、本当に、ごめん、許して下さい、私は、もう終わりかけてしまっています……、と、そんな思いを胸に、《そのひと》は、自身の残り時間を見つめ、涙をこぼしまくっていらっしゃるのです。それを見つめる《ここに描かれたひと》は、……なんてことだ、という愕然の下、たいせつな《そのひと》に語りかけないではいられなくなるのです。……なあ、お願いだ、お願いだよ、お願いだから、泣かないでくれ、ごめん、なんて、言わないでくれ。頼むよ、泣くなよ、詫びるなよ、逝ったりなんかしたら、承知しないからな、と――。「泣く」「詫びる」「逝く」という三つの動詞を否定命令形のかたちで指し出し、それを畳み掛けるという語りが、《ここに描かれたひと》が、眼前にいる《そのひと》を、どれほど、たいせつに思っているかを鮮明に伝え来てくれています。……、頼むから、ああ、お願いだよ、逝くなよ、逝っちゃだめだ、と、血を吐く様にして差し出される《ここに描かれたひと》の思い。一景の中で発される、たったひとことが、それを発したひとと発されたひとが築き合ってこられた、ここに至るまでの歳月、そしてその関りの在り様を、確と伝えきてくれているところに惹かれます。「まだ逝くな」という懸命の思いの行末を、どうか、どうか、なんとかして、と、祈念したくなってしまいました

■大賞：何もかも忘れた人を忘れない

葉火

直截なセツメイを一切、排した上で、決して言い募ることなく、静かに差し出されてある措辞の、その一語一語から沁みくる言いようのない切なさと寂しさ、そして、それらを踏まえた上での決意の様な情感が立ち上がりくることに、感無量となってしまいました。「何もかも忘れた人」という措辞が指し示す一つの状況。そして、それを見つめ、見据えている《ここに描かれたひと》が胸中に携える覚悟の態が、深と、伝わり来ます。思いを託す措辞の切り取り方、そしてそれらを取り合わせる取り合わせ方の、これ以上ないと思えるほどの的確さと、こうした素材、そして叙法を使いこなせる感性の鋭さ、得難さに、心底、打たれました。「何もかも忘れた人」を「忘れない」と、「忘れる」という同一の用言を二通りのかたちで使用していながら、その二つの動作主体を違える、という叙法のおもしろもさることながら、語りが指し示してくれている《ここに描かれたひと》が、対峙し続けている、ひとつの状況。それが孕む、如何ともし難さ、語りに内包されてある、哀しみを孕んだ優しさ、あたたかさが、なんといっても眼目でした。確と記憶に留めさせていただきます。いい句を、ありがとうございました！

■第一次選考通過作品

流れ込む父が見ている走馬灯　akke
父の日を選び旅立つ父らしさ　kawase akira
今日もまたおかわりしたくなる笑顔　sasasa
すまんのお子にわびし、父介護の湯　あ～たん
母ちゃんは今でも俺の道しるべ　アカエタカ
歩行器がはずむ廊下は孫来る日　アガサンパス135
これからのあなたと共に生きてゆく　赤猫
点滴の針抜くまでの二人きり　浅川の地蔵
自分ならどうして欲しい問いかける　あすママ
最期までいつもどおりの父でいた　あっきー
点滴が冷やし続けた深い皺　あまびえ
おさなごや母を泣かすなまだ生きよ　あやさき
あたたかいその微笑みが治療薬　あゆ
逝くんじゃない夫へ会いに行くと母　アルサプア
言えてない普通のことば涙して　あんこ
かあちゃんがばあちゃんになりいま赤ちゃん　アント二才馬場
病室を笑いに包み親送る　あんどらごら
食べてくれ私の分の元気まで　いい夢を
本当の強さを知った思い遣り　五十嵐こう

母はいつ疲れとマスクをとれるのか　いづくにか
車椅子押して花見の母笑顔　一刀両断
笑みだけの父の意探る面会日　一歩二歩
看護師さん夕べの布団ありがとう　伊藤一翁
家族見て最期に父が「仲良くな」　稲岡俊一
かあちゃんの介護で暮らすクルマ椅子　田舎の爺さん
その晩は母のふとんにくるまった　いなさく
そっと拭く道標だったでかい背な　いわきのみっちゃん
あなた誰おれおれサギも通じない　岩ちゃん
瓶開けよ渡す親父の細き腕　うー ちゃん@狼
陽は沈む二度と交わせぬ「また明日」　うぉーるなっと
落ち込むな必ず明日は日が昇る　うけさん
こんにちははじめましてがルーティーン　うさぎおんな
最後まで笑顔絶やさぬ父がいた　うたたねさん
母の荷を下ろした軽い母を抱く　海彦
暴言の瞳の奥の寂しさよ　梅 枇杷子
わがままは独りさびしさうらがえし　うめやえのきだけ
ありがとう想いのすべて込めて言う　うめりん
「ごめんなさいね」謝り皺が母娘の証　卯有
ほほ笑みに癒えた心の半返し　烏蘭

超えられぬ親父待ってろまだ逝くな
栄ちゃん

壊してもいいよ思い出以外なら
A.

泣き笑い一日終われば愛しいね
江坂 ひでき

手をつなぎよぼよぼ歩く幸せだ
越後屋

残命の父が笑顔を振り絞る
悦

床につく母見て安堵明日も又
ekko

ありがとうそして自分へバカ野郎
江戸川散歩

何度でも生まれ変わってまた逢おう
愛媛のみなこ

孫が来る母は必ず紅をひく
えみりぃ

祖母逝きて感謝、後悔ただ溢る
emo

化けて出てどんな君でも会いたいの
エンジョイワークス

看取るときあなたの笑顔忘れない
おいぶ

今出会う意味があるからここにいる
大川 八里

拍手無き人生舞台今日も診る
大阪ゆうちゃん

手をつなぎ母の歩幅で庭散歩
おーさん

家じゅうの機器が壊れる寂しさに
岡崎佐紅

手を握りようやく言えた「ありがとう」
置楽

あの世でも担当してね待ってるよ
小島 芙美子

逝く時は電話するぞと笑う父
おじゃすか

この涙流せる今に感謝して
おしん

される身の辛さ察してする介護
落穂

憧れし父よがんばれまだできる
尾津み

空睨む俺から母を奪うなと
おとちゃん

親孝行まだ途中だよお母ちゃん
踊へブバーン

ささやかな位牌の夫を手のひらに
御成山

支えてるつもりで今日も支えられ
お日様

認知症母の最後の「ありがとう」
オフィユカス

死に際を自分で決める潔さ
お結び

また来るね言える幸せ目にナミダ
オヤジノムスコ

人生に悔いなしと母潔し
温泉イズム

母の目に映る我が身よいつまでも
かいごん

ごまかしたさびしい瞳胸うずく
カオリン

不器用でごめんと父が逝った夜
かきくけ子

平成が昭和を介護する令和
カクト

見送って元の自分に戻れない
かぐや姫

油絵をぬり絵に変えて筆をとる
霞月

昨日より楽になったと笑顔咲く
かずちゃん

最期には壊れたけれど母でした
かずゆき

最後まで自力で風呂へむかう父
かっぱえびちぇん

勝夕

空にまでさよなら言った律義者　奏乎
抱き上げた母の軽さの重たさよ　かのカッチャン
母さんを一人にできぬ子よ許せ　かばくんのかば
来世ではもう無茶せんでおかあさん　かぴさん
気をつけて天国までの一人旅　ガブリータ
逝きてなほ心尽くしの妻の笑み　かめきち
ゆるしてねこどものころにもどったの　カヨ
今更を今からに代え春来たる　加代ちゃん
先に行くゆっくり来いと笑う母　カラスの行水
あと何回呼んでくれるのこの名前　かりゆし
子は父に父もまた子に目で感謝　かりんとう
母が呼ぶ母の前では父になる　カワサン
笑顔ならいつもの幸せがここに　川島そら
要介護明日は我が身が今日だった　蛙屋 柳斎
抱っこする今度は僕が母さんを　かわせみ時雨
母の手をぎゅっと握ってうなずいて　川端日出夫
長生きをただ祈るのみ不孝者　閑居人
生きるんだそう間単に逝きはせぬ　岩窟王
何気ない声掛け一つ頑張れた　かんちゃん
「順番さ」母の素顔に決壊す　カンナクズ
「やりきった」そんな経験くれた母　神無月

介護する異端誠実妻でこそ　きいちゃん
「また来るネ」寂しげに笑み「ありがとう」　菊池松山
病気でもしたいを全部やってやる　黄くま
肩を揉むただそれだけで咲く笑顔　キビコ
母逝きて山と残りし紙おむつ　黄鮒
わがままを言わせてあげる親孝行　きみちゃん
逝くときも娘気づかう母でした　木村 浩之
握る手を握り返して逝った母　木村隆夫
母さんと今夜限りの添い寝する　木村るみ子
江戸っ子の父の最後の「バカヤロウ」　キャンパー
照れ屋だなぁ死に様見せず逝った父　休鶏
カーテンを開き朝陽にホッとする　杏花
ばあちゃんが今日もみんなと笑ってる　ぎょしゅう
忘れても貴方の娘ここにいる　きょん
見送るか抱き止めたいかその背中　空気イヌ
ただ願う一緒にいたい明日からも　くすのき
この僕がお迎えなんて追い払う　口笛歩来
別れぎわがんこおやじの「ありがとう」　国仲沙那
温泉へ行きたいと言う手を握る　熊猫太夫
盲ろうの母に指添う地図の旅　久美子
父ちゃんの『愚直に生きろ』忘れんよ　黒潮

「息子だよ」手つなぎ歩く目に涙
ばあちゃんの笑顔でみんな救われる
笑う祖母「孫に似てるね」孫ですよ
まだ逝かん逝ってたまるかまだ逝かん
これも父あれも父だと受け入れる
待ってくれおぶらせてくれその峠
この寝息明日も続けと足さする
その刹那心で叫ぶ「ありがとう」
痩せこけた手を握りしめただ涙
目の見えぬ父が見透かすもう泣くな
溶けること知っているのか雪だるま
握った手の力強さは忘れない
介護する母の寝息で仕舞い風呂
ちょっと待ってね心の中でごめんねと
退院にもう来るなよと祈る日々
いつもより永い眠りについた君
ただ握りしわを数えるおかあの手
今世では返しきれない母の愛
悔いはない最期に言えた「ありがとう」
大丈夫やさしい嘘を重ね合う
分かち合う介護仲間の泣き笑い

黒猫の茶々
クンボー
けだま
元気マー坊
健聖
けんちゃん
行雲
幸島
こうちゃん
こうちゃんママ
小菊
ここなな
小桜なちゅちゃん
コスモス
木立慈雨
こたつ
コツミ ユチミヤ
ゴディバヤシ
こばちゃん
コバヤシ
こぶ茶

さいごだけ目を見て言えたあいしてる
笑み浮かべ父に会えると母逝った
瞬きの数でお返事口ほどに
想い出に心が叫ぶ逢いたいよ
悲しくはもうないはずの私は誰
また来るね手の温もりを離せない
聞こえたよ最後に返事くれた母
生き抜いた窪み残れり空きベッド
天国で待っているから慌てるな
もう一度母に添い寝をしたかった
逝く前のなんと穏やか母の顔
この掌誰かのためになるなんて
お母さん寝息たしかめ呟いて
「先生」はあの日出会った患者さん
行かないでなんで勝手に行っちゃうの
メガネにも杖にもなると誓う朝
おめでとう次は私が母に言う
大丈夫忘れる君を忘れない
駆け付ける孫の到着待った母
元気かと電話の主よあなたこそ
痩せ細ったゴツゴツだった父の手よ

こま屋さん
ころん
ごん爺
さおり
坂本 未来
さくら
桜
桜小町
さごじょう
山茶花
佐千子
皐月晴れ
さっち
薩摩の医大生
さばのみそに
三郎
さやちゃん
さわまう
さんごしょう
参肆壱
三龍

開かぬ目ににじむ涙は母の声
帰ろうねともに過ごしたあの家に
あんた誰あなたの娘泣き笑い
涙するあなたの背中抱きしめる
いつの間にこんな小さくなった父
いつのまにちっちゃく母の手はぬくい
呼ぶ声に泣くのは後にとっておく
触診の手が心音を和らげる
いのちの灯消えぬようにとさする足
生ききると１０３歳の心意気
孝行をしたくてそっと手を握る
「息災で」言ったお前がなぜ逝くか
「見る」じゃない「観」て「看」ています丁寧に
サヨナラを言わずまたねで妻は逝き
背中越し母の言葉を噛みしめる
ご褒美や今日1日にありがとう
守りたい私が繋ぐ明日の朝
秒針よ急ぐなもっと子でいたい
ありがとう手押し車を撫でる母
最後ならここでいいやここがいい
砂時計落ちゆく時を気づかせず

しーしー
紫雲山
JK
シェルティ
次元
ジゴさん
幣原
シナモン桂
しなやかーる
しばごう
しまうま
島根のぽん太
島水希
島村冬樹
しまりす
しもちゃん
霜月蒼
じゃじゃまる
じゃむぱん
シャレスキー東村
ジャンボ

悔いてなおまだ悔い残る枕もと
最後まで生きる尊厳守る人
生受けて死までの時間一生は
認知症が教えてくれる親心
怖かった父が可愛くなっていく
杖使い一人で歩くど根性
泣きながら治療に耐えた子の笑顔
先に逝くゆっくり来いと言い残し
何もかも忘れた母が「ありがとう」
忘れない小さな父の大きな手
ありがとう退院してもありがとう
今朝もまたはじめましてと母笑顔
遠い日の母に戻った死化粧
母の手を握る育ててくれた手を
しあわせと気づくあなたといた時間
悩み抜き介護離職の切なさよ
会うことでつなぐ明日の母らしさ
握る手に込めた思いを汲む月夜
鼓動ふれ生死の狭間折りかえす
「家帰る」叶えてやれぬ頼み事
できることゆっくりやろう大丈夫

シュウ
秋光
十猪
ジョアン
章香堂
鍾馗
硝夕
しょうちゃん
正ちゃん
しろうさぎ
しん
しんちゃん
新屋洋子
翠夏
彗星
スーさん
末っ子
すす
すずらん
スナフキン
すぬきち

起き上がり僕に気づけば笑い皺　すまいる
今はまだ受け入れられぬそばにいて　スマイル
戴帽（たいぼう）の初心を日々の糧（かて）とする　井蛙
体重が減って存在重くなる　清詞薫
縁有りて今ここに我生かされん　正流
何でだよ何で父さん泣くんだよ　せきぼー
もう一度手を握ってよおじいちゃん　セブン
あたたかい母の最期の保冷剤　仙小
最期まで父であろうとする貴方　洗流
母と子のそれは一つの物語　蒼介
「死なないで」言えずに折った千羽鶴　ソジロウ
「ありがとな」今日はあの日の母のまま　ソフィーと双子の姉妹
先に逝く我が子に咽び詫びる夜　そよとの風
看護師さんは最後に出会う家族だね。　ソラマメ
「かあちゃん！」と意識戻れと呼び続け　そんちく
痩せてゆく母を両手で抱きしめる　ター坊ママ
母が俺見つめたままで天昇る　大将
闘病といわぬおやじの平和主義　たかはふみと
オムツ替えられてた僕がオムツ替え　たかひろ
介護して介護されての巡り合い　たかやす
兄の名を呼ばれ笑顔で返事する　タカン

皆のため我慢するのか母よ泣け　拓ちゃん
有難いいつも笑顔でいてくれて　宅トレ
忘れないあの時の手の温かさ　たけのこ
どうすればわたしの寿命わけられる　たなかちろ
ベッドから「元気でなぁ」と母の顔　タヌ吉
そこに居るだけでよかった居るだけで　たぼちゃん
皆さまに生かされており今日一日　たま
がんばってじゃなくがんばったのですね　たんぽぽ
親心命のかぎり子の名前　ちー
歩きたい支えますから前を見て　チーちゃん
その先の笑顔に向かう車椅子　chie
ごめんよりありがとうねが欲しいのと　ちくわ
ピエロにもなれるよ笑顔見れるなら　チズチャン
朦朧の祖父が私のために泣く　千船 早帆
失って初めて気づく当たり前　ちゃる
燃え尽きる前に一言打ち明けて　ちゃんと
最後にはかけがえのないありがとう　チャンプ
最幸の最期だったとみんな泣く　中年やまめ
見続けた父の背流し織る介護　ちゅん子すずめ
母よもう空でブランコ漕いでるか　ちゅんすけ
ただ一つあなたの生にありがとう　超絶怒涛邪馬山田太郎

「ありがとう」微かに口が動いてた
患者さんみんな私の先生です
見尽くしてなお命とは命とは
ごめんは無し私あなたがだーい好き
好きだった桜を待たず父は逝く
大声で笑う数だけ生き延びる
子に返る母はわたしの子となれり
焼き付けて見つめたいのになぜ潤む
病む妻(ひと)を真綿の肌で包み込む
ありがとね言ってくれたのありがとね
施設からお会いになれますと電話
死ぬまでは努力しろよと父は言い
強かった父が弱くて手を添える
子に戻るあなたは「母」をしてたのね
病に臥す土方の父の白き肌
花道をゆっくり歩き父が逝く
ごめんねに聞こえぬふりでまた明日
その痛み代われるならば代わりたい
ばあちゃんよ忘れないでね孫のこと
背負われた思い出ばかりわが記憶
オムツ替え看護士さんに手を合わす

超捻転
チワワ娘
椿寿堂
つきねこ
月見風
ツタツタ日本
つちのこ
つべる
鶴見川風雲水
ティップ
テクノボー
デシ
てっちゃん
てと
てんびん座
天和
糖質無制限
桃李
とおとぉ
ドクトル
徳丸はるえ

握る手を握り返してくる命
手を握り頷くだけの母を診る
ばぁちゃんの最期の笑顔忘れない
手を握る願いは一つ目を開けて
「おやすみ」と母、言ったきり逝ったきり
もう来るな返す言葉はまだ逝くな
手を止めて「頑張りんさい」がんばるよ
手を取って1人じゃないと感じ合う
どなた様家族様です母さんの
オレは継ぐ父の寡黙と愚直さを
いるだけで母はひだまりだと気づく
「雨降るぞ早く帰れ」とベッドの父
手のぬくみ笑顔になれるありがとう
我の名をくん付けて呼び父が逝く
頑強な父が最期に命乞い
家族より家族であったありがとう
覚えてる声もにおいも苦しみも
「ありがとう」気付けば僕が言っていた
床の父声なき声を母は汲む
うで組むのよろけるからよ照れないで
お迎えは怖くないけど「もう少し」

とし
トシサト
としゆき
となみ
とみこ
トミスター
ともき
共に
ともぱぱっち
とよ爺
トラノ
ドラママ
とんかつ
なおきん
なおちゃん
なおなお
長月優子
なぎな
梨太郎
なつ
ナツメ

手で歌う大きな栗の木の下で
何度でも聞かせてほしいその話
優しさが見えない傷も癒してる
その力多くの生命救ってる
点滴を甘露と受けて母眠る
あの父が母の手握りありがとう
頑張って心ささって大丈夫
袖濡らす祖母の背中をさする父
目を擦る寝たら最後と最期の日
やさしい手添えて明るむ顔の色
孫が来る面会の日の白髪染め
母ちゃん！と母に呼ばれて母を看る
手をひかれ歩いた道を手をひいて
「大丈夫」私のセリフ母が言う
忘れないあのこと言葉その姿
力なき手をただ握る余寒の夜
気の強い娘でごめん言えぬまま
握りあう手で会話して懺悔して
葉物野菜うまい季節よ死ぬな父
車いす押されて笑顔押す笑顔
お母さんやっと安らぎ見つけたね

七瀬 椋
なにわ紳士
なまけもの
なんちゃーかんち
西大路湖山人
西対州
にゃんにゃん
ねこ
猫大臣
眠り猫
野崎 眞奈美
のびこ洞
のほほん
のぽ丸
のりのり
ハーフムーン
ぱたこ
バタヤン
花一匁
花キャベツ
花太郎

かしましい母が無口になった朝
ありがとうその一言でがんばれる
憶いまで断捨離するな手を握る
荒息は生きたいという母の声
逝かないで母さんわたし悔いばかり
抗がん剤家族のために選ぶ父
あと五分頑張れ父よ孫が来る
老いた母上ずるようなありがとう
大河好き父の命が流れゆく
忘れても生きてるだけでいいんだよ
びょういんは死ぬためじゃない生きるため
最期まで母の口癖ありがとう
君の声今聞くことができたなら
1秒も惜しむ母とのこの時間
声枯れた父は感謝を目で語る
お互いに同じこと言う「ありがとう」
次の世も母さんの子に生まれたい
子のためと食すひとさじ神祈る
お母さん今度は俺が支えるよ
あぁ父ちゃんまだ呼ばないで母ちゃんを
子に戻るそれは違うと繰り返す

華杏
はは
母の子
ばばりん
ハミングバード
林光子
隼人
パラム
ハリネズミ
はるちゃん
はるね
春人
ぱるぷんて
はるやす
ハルル
ぱんぷらー
ヒカル
久と春
びすまーま
ひで
ひまごママ

また来ると言って最後に握った手
大丈夫ひとりじゃないよいつの日も
嫁にいく最期に言えた間に合った
1年の経過観察また会えた！
老いた手の皺の数だけかんしゃする
細い手に握りしめてる生きる意志
私しか知らない父の浪花節
痛くない苦しくないと嘘言うな
介護するしている私されている
何か違う仕事と親のオムツ交換
あなた誰？妻に聞かれて涙ぐむ
看取られる作法教えに父母祖父母
看護して生きがいもらう虚脱感
笑えればそれだけでいいお母さん
本当の介護を知らぬ他人(ひと)の声
泣き笑い詰め込んでいる介護録
握る手の皺を数えて母を知る
いてくれるただそれだけで幸せよ
「ありがとう」伝えてくれてありがとう
匙を手に俺は親父に母は子に
最後の日笑顔の母の涙拭く

風信子
ヒヨコ
ひらかな
ビリケン真
ひりん
ひろぴー
ひろP
大海
琵琶湖こあゆ
ふ～たく
フーテンくん
風流士
福多郎
藤田ゆきまち
ふじちゃん
ふじちゃん
二季
ぶったま
ふゆみ
ふりかけ
ブロッサムマザー

おんがえし介護と書いてそう読もう
最期まで聞こえているよありがとう
吸う息を吐き切り母は先に逝く
生きてるだけで幸せなんだ他いらん
父さんの献身母を包んでる
母ちゃんと呼ばれて「母」を演じ切る
遅かったたった五文字がなぜ出ない
九歳差妻に介護を予約する
祖母ちゃんの荒れた手握る枕元
ノックする音でわたしと分かる父
頼むから泣くな詫びるなまだ逝くな
そっくりな父が私を笑わせる
親父ごめんかじったすねもやせ細り
頬撫でて明日は良くなる信じたい
いくつもの手と手がつむぐ記憶の環
声だけは抱きしめていた最期の夜
育った上残った家族元気だよ
天国の 仲間上母を 頼みます
また来るね会いたくてまた強くなる
ありがとう空のばぁばに叫ぶ僕
相棒よこのまま逝ってしまうのか

pei
平次の保護者
別腹
べべぞー
べべの介
ベンジャミン
ポコにゃん
星新
ほり・たく
白とり貝
ホルモンくん
ほろろ
PON5
bonzu
MAI
マイ
まごころ
マコッチャン
まこもじゃる
まさひろ
まさみ

病む人の心に当てる聴診器　マッサン
見つめ合う瞳の奥で叫び声　マッサン
「ごめんね」じゃないよこちらが「ありがとう」　松下弘美
今晩が峠の母に添い寝する　松田素風
ゆっくりでいいよ令和はまだ長い　まっちゃん。
徘徊の母は少女に戻りけり　松の妻
長生きを詫びるおかんを抱き叱る　松の本人８８８８
叔母にだけ甘える言葉死にたいと　豆助
今言うよ一生分のありがとう　まめ大福
孫の顔まだ見ぬうちに逝くな父　まるまるまま
「運命」と受け入れた父できぬ僕　麻呂
思い出に想いを重ねありがとう　麻呂
「逝かないで」かき消すように雨が降る　まろりん
泣かないで涙枯れるよお母さん　マンボウちゃん
姉看取り姉追うように逝きし義兄　みえこ山
大丈夫きっと元気になれるから　みか
いるだけで生きてくれてるだけでいい　みかん
「ありがとう」話せぬ祖父が言って逝く　みちゃん
おかあさんぎゅっとつかんでたのんだよ　みっちゃん
たましいを零さぬように背を洗う　美都こんどりあ
行く先の消えぬ不安が通じ合う　翠

ごめんねとありがとうねで逝った母　みどりの子
母さんは負けないつもり泣かないで　ミナト
死をいくつ経ても別物母の死は　みなまる
母が逝く空が私と泣いている　ミファ
あと一日あと一日を積み重ね　みみけい
逝く前に思い出したねおばあちゃん　みやこ
「ありがとう」「ごめんね」母は繰り返す　宮ちゃん
孫の声聞こえて母の手に力　宮のふみ
また会えるだから言わないさようなら　みやみや
逝った先思う存分酒飲んで　みらい
一日でも長くと母の手をさする　みらいむ
手を握り命の温度受け止める　みんみ
介護士さん泣いてくれたよおばあちゃん　むーむー
手背のルートは諸刃の剣だ　麦
眼を開けて夫婦喧嘩がまたしたい　無色
なんてことなしの雑談じんわりと　村崎山藤
神様に母を渡してなるものか　盟主クサイ
ありがとう冷たいけれどあたたかい　メガネの山田
母の目の中に幼き我がいる　めめ
ありがとうその一言にありがとう　メンマ
そう言って支えてくれた「大丈夫!」　モコ

さいごまであなたらしくでいてほしい
寂しいよ心に居てもさわれない
枯れるまで泣いて想い出だけ残る
歳重ね台本にない風が吹く
読み返す看護日誌に母の声
母ちゃんよ朝が来たから起きてくれ
生きようとしてるあなたに生かされる
指切りを解かずに眠る母は吾子
あなたから助けてもらう我が生命
今少し灯れよ母の命の灯
孫抱っこ一度きりだが会えたんだ
天国のジイジはボクを忘れない
懸命に生きててくれてありがとう
看護師が来るとはしゃいだ父が居た
母は言う絵本の中に住みたいと
ありがとうの笑顔で明日も頑張れる
幾度でも笑顔で聞くよその話
まっすぐに生きてと遺し逝った母
人生を顧みる日々くれた部屋
父さんの強さを知っている涙
母が言う三分毎のひさしぶり

もち
本宮わこ
もふもふ
桃太郎
森 かえで
モンテカルロ
やーくん
八木 五十八
やす
安田蝸牛
やっち
八十日目
柳瀬祐
やののっぽ
山田太郎
山田遊
やまびこ
山宗雲水
やまやま
やんちゃん
唯我独尊

最期の日あなたは言った幸せにと
ただそばにいるそのぬくもりにただ感謝
バカ息子今日はたい焼き置いて行き
病室で足湯と涙2人きり
陽だまりに本音で話す父といる
母は今思い出の中散歩中
子に戻る母と一緒に遊ぶ日々
帰りたいふと見る窓の哀しい目
ありがとう伝えたかった誕生日
助けたいまずは近くのあなたから
婆恋し廊下は爺の写真展
変わりゆく母の世界を抱きしめて
安らかな寝顔にホッと「お疲れさん」
何もかも忘れた人を忘れない
この咳も親父が生きている証
洗濯をしなと声掛け母心
ありがとう不意に聴こえた気がします
手をにぎり俺の生きざま見ててくれ
「してない」は「出来ない」よりも辛いこと
延命を聞かれて悟る我が命
報われず力尽きては辞めてゆく

ゆう
ゆう
ユーキ
優ちゃま
夕凪
夕陽のガンマン
ゆうゆう
ゆずろう
弓月
ゆづき
ゆみっくりん
ゆらら
宵の明星
葉火
陽光
よーせい
よし
義騎
義輝
よっちゃん
よっちゃんばんだ

祈るしかできない俺に母笑う
喧嘩ばかり素直になれずごめんなさい
がんばって無理しないでと手を握る
「そばに居て」夜のコールが鳴り止まぬ
かあさんまだまだ「ただいま」を言わせて
産声と別れの涙聞きし朝
母さんを頼むと父の初涙
もう一度呼んで貴方がくれた名を
母の日は涙が脆くなってくる
先生の一言でよく眠れます
あとたのむ家の農業まかせたぞ
母ひとり子ひとり父の名で呼ばれ
生きたいと逝きたい父のやじろべえ
この声と手の温もりが大好きです
抜け殻を残して星になる母よ
懸命に生きたあなたが誇りです
ありがとう心やすまるがんばれる
ぬくもりを感じる先に母浮かぶ
「何故産んだ！」が「産んでくれてありがとう」に
天仰ぐ泣くんじゃないと空が言う
病院のベットの上でそばにいて

よもぎもち
四大文明
ライフレイコ
ラッパさん
ランプ
りさ
龍神
リン
りんご
りんりん
ルアーマン
ルーキー
ルーク
るーちゃんまま
ルーン
ルルル
れいよっちゃん
レインボー
レディ馬場
レモン
レモン

暴言の父の最期の「ありがとう」
まだ元気憎まれ口を聞くうちは
子供らに看取られて逝く往ってくる
大切な時間もらったホスピタル
孫がむくゆで卵持ち涙かな
早すぎる落ちるな父の砂時計
喋らない、喋れない母頷く目
細く燃える生命力に会いに行く
告知うけ看られる側の思い知る
手を繋ぐ目にも杖にもなれるから
冷えた手でごめんなさいと背を支え
噛み付いて伝えるもだえ話したい
「すまないね」つぶやく母の目に涙
飲み込みを待って笑顔の小休止
吸入器握れば握り返す手よ
先生のあのひとことが宝物
ちぎれ雲何も告げずに逝くなんて
リフレイン記憶に遠き祖母の唄
意識無い母へ渾身子守唄
母さんよごめんと今も悔悟の日
だいじょうぶ嘘つく母の優しさよ
処方箋薄く希望と書いてある

蓮花
老人生
RON
わこわこ
笑うカメ
わらび
奥の寄道
各下奈磨江
向日葵大好き
今井純生
柴田 睦郎
緒方 水花里
招き猫ひーちゃん
菅亜希子
菅伸明
豆ヤ芋子
道
白山
豹悟
風まかせ
明日香
萬 桜林

CO1 （シーオーワン）ソニック 電動歯ブラシ

31000ブラシストローク/分　ブラシヘッド頸部直径5mmで小回りが利く　完全防水

抗菌設計でいつも清潔　4時間充電で20日以上使用できる